

日本海海戦一二〇周年記念式典

式辞の前に一言申し上げます。

昨年末に生起した掃海艇「うくしま」の火災、沈没事故により、いまだ隊員一人が帰らぬままです。一日も早く家族の下にお戻りになることを、皆様とともに衷心よりお祈り申し上げます。

式辞

本日ここに、佐世保市長・宮島大典様、佐世保地方総監・福田達也海将、佐世保自衛隊後援会会長・金子卓也様代理 大島賢一様、衆議院議員・金子容三様代理・草野圭祐様、県議会議員・外間雅弘様、山下博史様、溝口芙美雄様、湊亮太様、市議会議長・久野秀敏様、市議会議員・久保葉人様、甲斐義博様、県北振興局局長・大瀬良潤様をはじめ、多くのご来賓をお迎えし、日本海海戦一二〇周年記念式典を挙げてまいりますことは、主催団体一同の深く喜びとするところであり、厚く御礼申し上げます。

さて、当時、世界最強と恐れられたロシア バルチック艦隊を撃滅し、国家の危急を救った東郷元帥は、どのような世界観や死生観をもつてこの戦いに挑んだのでしょうか。

日露戦争から遡ること一二〇年前の十八世紀末、ヨーロッパでは、封建制度や専制政治に対する批判の高まりとともに、フランス革命などの市民革命が次々と起こります。革命の波は国家間闘争に波及し、やがて、世界は西欧列強による植民地争奪戦の舞台と化しました。

そのうねりは、日本にも及びます。東郷元帥は薩英戦争に従軍し、西欧との圧倒的な力の差を目の当たりにして、危機感とともに強い焦燥感を抱き、海軍力の強化に目覚めます。

その後、海軍士官としてイギリスに留学し、紛争の歴史を学ぶにつれ、「争いは抗うことの出来ない時代のうねりに翻弄されて繰り返される。」と得心し、国の安寧は自ら勝ち取るものであり、一歩たりともたじろがない不動明王の化身ならんとする覚悟・死生観が育まれます。

これが武士道精神と相まって、卓越した指揮・統率力の源となります。「愚直と笑われるとも、終局の勝利は必ず

誠実な者に帰すべし。」と兵を鼓舞し、昼夜を問わず厳しい訓練に明け暮れ、連合艦隊を海戦史上、たぐいまれなる圧倒的勝利へと導きました。

東郷元帥は、また、海戦で重傷を負ったロジエストヴエンスキーバルチック艦隊司令長官を見舞うために佐世保海軍病院を訪れ、武人としての崇高な使命感に対し、互いに敬意を表しあっています。

ひるがえ
翻って、現代に目を転じてみれば、世界は、民主主義陣営と権威主義陣営の対立が先鋭化し、分断の溝は一層深まるばかりです。力を背景にした一方的な現象変更がまかりとおり、国際社会は、ウクライナやパレスチナ紛争の解決に、手をこまねいています。

自国第一主義が声高に叫ばれ、保護主義が顕在化し、戦後、人類の英知として創設された国際協調体制は崩壊の危機に瀕しています。これまで世界秩序を牽引してきた米国の求心力にも陰りが見え始めてきました。その一方で、東アジアの権威主義国家の連携が、これまで以上に深まっています。

我が国の安全保障環境は、戦後最大の危機を迎えており、百二十年前の開戦前夜を彷彿させるものがあります。

しかしながら、それとは裏腹に、我々が八十年間享受してきた平和な歲月は、「平和は所与のもの」と浅はかな認識を植え付けてしまいました。安全保障環境の悪化に真摯に向き合うことを忌避し、憲法改正の議論も遅々として進んでいません。悲しいかな。百二十年前の真逆を突き進んでいます。

優れた国際感覚と幅広い視野で時代を俯瞰し、鋭い洞察力をもって情勢を分析して、明日は我が身と心得、日々鍛錬を怠らず、国家の危急に際しては、率先垂範、身の危険を顧みず果敢に行動する。祖国に殉ずる志に対し、敵味方分け隔てなく敬意を表し、品位を保つ。これこそが、東郷元帥が世界三大提督と崇められる神髄です。

史実は語り継がれて初めて歴史となり、生きる教訓、糧として意義あるものになります。「先人がどのような気概をもって国難に立ち向かってきたのか」、我が身を置くことにより、進むべき道標が見えてきます。今こそ、我が国を救った東郷元帥の矜持に思いを馳せる時だと思えます。

佐世保水交会は、今後も、この海戦と同じく国家の危急に對し身を挺して毅然と立ち向かった勇敢なる人々の偉業を末永く顕彰していく所存です。

結びに、多忙な中にも寸暇を惜しんで本墓地の清掃奉仕すんかをして頂いている隊員の方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

加えて、本式典の開催に、ご支援・ご協力を頂きました佐世保地方総監部及び式典にご参列いただきました皆様方に心より感謝申し上げます、式辞と致します。

なお、本墓地正面にあります「海の防人の碑なみせのいし」には、佐世保鎮守府開庁以来、祖国に殉じ、日本海海戦で散華さんげした英霊を含む十七万六千余柱の霊名れいめいが納められ、また、海上自衛隊の殉職者百六十二柱の御霊みたまがお祀りまつされております。

ご参列の皆様におかれましては、この機会に同碑あいどうに哀悼の誠まことを捧げて頂ければ幸甚です。

本日は、生憎の雨模様の中にも拘わらず、ご参列頂き誠に有難うございました。

令和七年五月二十四日

公益財団法人 水交会

佐世保支部 会長 梅崎 時彦